



205号

2015 / 7 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



「龍の声を聞く」 雲南省羅平・九龍瀑布群風景区にて 撮影：2015年2月28日

撮影：高橋節子

九龍瀑布群は九龍河の流れにできた大小十段に及ぶ滝で、それぞれが異なった風情を持つ。一番大きい滝が写真奥、幅112メートル、落差56メートルの「神龍瀑布」だ。筏に乗って滝つぼに行ける。ミストシャワーと天地に轟く龍の声で暑さを忘れた。

‘わんりい’ 7月号の目次は最終ページにあります

以德報怨

寺西俊英

私は、昭和21年(1946年)、つまり第2次世界大戦が終わった翌年に広島で生を受けました。広島は世界で初めて原爆を投下された都市ですが、この原爆により祖父は3日後に全身ヤケドで亡くなりました。祖母と両親は爆心地から2km以内で被爆したので国から「被爆者手帳」を交付されました。今でこそ福島原発事故で「半径〇〇km以内は〇〇シーベルトの放射能が検出」など云々されますが、投下された当時はシーベルトの“シ”の字もなく、広島市内には当時残留放射能がどのくらいあったのか知る由もありません。そして市内は70年間草木も生えないと喧伝されました。

しかし、おかげさまで祖母は90歳、父母は80歳台まで生き延びることが出来ました。考えてみれば戦争末期には働き盛りの男は殆ど戦地に行っていたので、老人と女性と子供しか残っていない街に無残にも米国は原子爆弾を投下しました。米国人の中にはこの戦争を早く終わらせるためやむを得ない手段だった、という人がいますがとんでもないことです。

これに対して、これまで何人かの方から「あなたは米国を憎んでいるでしょうね」と訊かれました。それに対しては私は次のように答えました。「米国は好きではありませんが、祖父が死亡したことや父母の被爆に対して米国や米国人に仕返しをしようと思ったり、恨んだりしたことはありません」と。

この気持ちは一つには祖父が亡くなった時、私はまだこの世に生を受けていなかったことがあるでしょう。したがって、もし私の目の前で祖父が亡くなったらあるいは米国に対する考え方は違っていたかもしれません。また時間の流れがあるでしょう。戦後すでに70年経ったのです。広島は緑あふれる美しい街になりました、「1000年恨」という言葉が某国で言われましたが、私にはいくら身内を亡き者にされようとも1000年も恨み続けるという気持ちは理解できません。

これで思い出すのは、日本が大戦で負け、その戦後

処理を話し合うサンフランシスコ講和会議でのことです。会議の流れが日本に膨大な賠償金を課し、4島(本州、四国、九州、北海道)の分割統治に傾きかけたとき、スリランカ(当時セイロン)の蔵相であったジャヤワルダナ氏(1906年～1996年)が「憎しみは憎しみで消えず、愛することによって無くなる。我々はもう憎しみは忘れようではないか。スリランカは賠償請求しない。アジアの将来にとって自由な日本が必要である」と演説したのです。おかげで日本は4分割される危機も去り、今の日本の姿があります。スリランカには感謝してもしきれない恩があります。

もう一つの思い出は私が26歳の時、つまり1972年の日中国交回復です。田中角栄・周恩来の両首脳間での日中共同声明で「戦争賠償の請求放棄」が明記された文書に両者が毛筆で署名したことです。当時私は、やはり蒋介石が言った「以德報怨」(怨みに報いるに徳を以ってする)との精神が生き続けているのだな、と中国の懐の深さ、立派さを思ったものです。この言葉の背景には庶民には分からない事情があると思いますが素直に受け止めたものです。しかし現実はこの言葉が死語になるのではと心配させられる事象が近年あまりにも多いと言わざるを得ません。

もう一度広島の話に戻ります。広島市民の多くが米国に対して憎しみの感情を持たない、さらに言えば友好的な感情を持つ理由の一つが、アメリカ文化センターの果たした役割と私は思います。同センターは、戦後日本においてGHQが日本各地に置かれ、日本国民の民主化、米国への理解を進めることを主眼としました。そして広島センターの館長としてアボル・フツイ氏が家族と共に来日されました。一家は日本文化に溶け込もうと努力し、一家のその姿に多くの市民は彼らを愛したのです。まさに「恩讐の彼方」でした。

日本は近隣国と今はぎくしゃくしていますが、一刻も早く手を取り合う時代が来てほしいと切に望みます。

(都合により、7月号の北京雑感はお休みします)

wén sī xíng zhū
聞 斯 行 諸

(きくがままに斯れ諸を行う)〈先進第十一〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

孔子は実行を重んじた人でした。いかなる学問も実践を伴わなければ意味がないとさえ考えていました。そしてそのことを折りに触れて何度も弟子たちに伝えています。『論語』の中の、「君子欲訥於言，而敏於行 (Jūn zǐ yù nà yú yán, ér mǐn yú xíng)」(君子は言に訥にして、行いに敏ならんと欲す)〈里仁第四〉、「君子耻其言之过其行 (Jūn zǐ chǐ qí yán zhī guò qí xíng)」(君子は其の言の、其の行いに過ぐるを恥ず)〈憲問第十四〉などの言葉がそれを表わしています。しかしこれはあくまで原則です。孔子は、この原則を誰にでも杓子定規に当てはめようとしていたわけではありません。『論語』に次のような場面が出てきます。

ある時、子路が孔子に訊ねました。「聞斯行諸? (Wén sī xíng zhū?)」(聞くがままに斯れ諸を行わんか)。先生のお説を聞いて、それをそのまま実行に移してよろしいでしょうか、と。これに対して孔子は答えました。「有父兄在。如之何其，聞斯行之 (Yǒu fù xiōng zài. Rú zhī hé qí, wén sī xíng zhī)」。(父兄在ます有り、之を如何ぞ其れ、聞くがままに斯れ諸を行わん)。君には年長のご家族が居なさるはずだ。いくら私の意見だからといって、その方々に相談もしないで、そのまま実行に移してよいものかね、と。これが孔子の答えでした。

続いてもう一人の弟子の冉有が同じ質問をしました。その時の孔子の答えは意外にも「聞斯行之 (Wén sī xíng zhī)」(聞くがままに斯れ之を行え)。そのまま実行しなさい、でした。この一連のやり取りを聞いていた若い弟子の公西華は首を傾げ、孔子に質します。

「さっき子路が先生のお説をそのまま実行してよろしいかと訊ねた時、先生は、『年長の家族が居なさるはずだ』とお答えになりました。ところが冉有が訊ねた時は、『そのまま実行せよ』とお答えになりました。私は迷います。どちらが正しいのでしょうか」と。

孔子は答えました。「求也退，故进之。由也兼人，故退之 (Qiú yě tuì, gù jìn zhī. Yóu yě jiān rén, gù tuì zhī)」(求や退く、故に之を進む。由や人を兼ね、故に之を退く)。求(冉有の本名)は慎重派だから背中を押してやったのだ。由(子路の本名)は並外れた行動派だから頭を押さえてやったのだ、と。孔子はまた次のようにも言っています。

「可与言，而不与之言，失人 (Kě yǔ yán, ér bù yǔ zhī yán, shī rén)」(与に言うべくして、之と言わざれば、人を失う)〈衛霊公第十五〉。言うべき相手に言うべきことを言わなければ、人を失うことになる。さらに続けて次のようにも言っています。「不可与言，而与之言，失言 (Bù kě yǔ yán, ér yǔ zhī yán, shī yán)」(与に言うべからずして、之と言え、言を失う)。どんな言葉も、言うべきでない相手に話せば、せっかくの言葉が無意味になってしまう、と。孔子は常に相手に応じて、慎重に言葉を選んで話していたのです。このことは『論語』すべてを通して言えることです。ここのツボを押さえて読むと『論語』は、より一層面白いものになるでしょう。さもないと、『論語』は矛盾だらけの書物ということにもなりかねません。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

具体的な時代、場所ははっきりしませんが、中国の、ある都から150キロほど離れた寒山県というところに伝わった物語です。

寒山県のある町の南に寒山という山があり、その山には一宇の古い寺がありました。お寺の名前は、「寒山という山にある寺」という意味で寒山寺と名付けられていました。

ずっと前から、寒山寺には妖怪が出入りするという噂話や、白い狐が現れるといった噂が伝わっていました。長い間にそのような怪しい噂話が広まって寒山寺を訪れるものも少なく、ひっそりとした淋しいたたずまいの寺でした。修業するお坊さんの数も段々少なくなって行き、とうとう歳を取ったり体が丈夫でないお坊さんだけになってしまいました。

ある時、柳という書生が都での科挙の試験に落第して故里へ帰る途中、寒山寺の近くを通りかかりました。実は柳書生は既に30歳近くになっており、今回が3回目の落第なので深く沈み込んでいました。しかもさらに悪いことに、身に着けた金銭を旅の途中ですっかり盗まれて無一文になり食事もままならず、心も身もともに疲れ果てて今にも倒れそうな状態でした。そんな風でしたので、近くに寒山寺という寺があると聞き、一泊でも良いからそこで泊まろうと心に決めてよろよろと這うようにして寒山寺にやってきました。

その昔、科挙の受験生は受験の道中でよく寺院で宿泊しました。静かで読書ができる上、お坊さん達は善行を重ねる目的もあって無料で食事と泊を提供してくれたのです。

柳書生はやっとのことで寺院の門をくぐると張り詰めていた気持ちが緩み、心身の衰弱から倒れてしまいました。如何にも歳を取った風の

お坊さんが、熱いお粥を持って来ると柳書生に食べさせゆっくり休ませました。暫くすると柳書生はだんだん元気を取り戻して来、この旅で遭遇したことをボツボツとお坊さんに話し始めました。お坊さんは彼が遭遇した様々な苦勞を聞くと柳書生にいいました。

「お元気を取り戻されて何よりです。しかし、まだ十分回復していないご様子に見受けられません。暫くここで泊まって養生されては如何でしょう。ただ、ここではじゅうぶんなおもてなしはできませんが。それにここには妖怪や白狐なども住んでいるという噂も聞いたことがおありでしょう。それでも大丈夫ならということですが」

「私は恥ずかしながらあわや死ぬかもしれないようなありさまでした。温かいお心遣いを頂き生き返りました。ここでしばらく養生させてただけることはこの上なく有難いことです」

柳書生はお坊さんのことばに安心して暫く寺院に滞在し身体の回復を待つことにしました。一か月ほど滞在する内に段々元気を取り戻して来ました。

この間、寺院のお坊さん達は皆親切に柳書生の面倒を見てくれましたので、柳書生はそのお返しをしたいと思い、水墨画を描いたり書を書いたりして町で売り、また文字を書けない人々の文書作成を手助けして得たお金を寺院に生活費として渡したりしていました。そんな日々を続けていたある日の夜、柳書生は部屋の入り口を開けたまま本を読んでいますと、人の気配をふと感じました。頭を上げてみますとなんと入口のところに白い服の、若く美しい女性が立っています。書生は吃驚するとともに寒山寺には妖怪が出るという噂を思い出しました。

「あ、あなたはどなたですか？ も、もしかしたらこの寺に出るという妖怪のお仲間ですか？」

と、その女性に問い掛けました。すると

「私は狐です。でも怖がらないでください。私は人間に害を与えるようなことはいたしませんわ。あなた様が毎夜、寂しくお一人で勉強されていらっしゃるご様子を拝見してお気の毒に思っておりました。今夜はちょっとした料理を用意しましたので、ご一緒に頂きませんか」

と女性が答え、手に持った籠から幾種類かの美味しそうな料理を机に並べました。

優しく微笑みながら話す女性の言葉に柳書生はひとり頷いて、「そうなのだ。妖怪や、狐の話はいろいろ聞いているが、人間に悪さをしたり乱暴をする話は全然聞いていない」と考えました。そして、目の前に並べられた、これまで味わったことがないような上等な酒や、美味しそうな料理に強く惹きつけられ、最初に感じた恐怖感もどこかへ去ってしまいました。そして彼は料理の方を向き、唾を呑み込みながら箸を取りました。

「お名前はなんと言うのですか。この近く住んでいるのですか」

書生は食べながら訊きました。

「はい、寺院の隣に住んでいるのです。名前は、そうですね。とりあえず白狐と呼んで頂いても構いません」

それ以後、白狐は2、3日毎に必ずやって来るようになりました。

白狐の容貌は柳書生がこれまで出会ったどの女性より一際美しく端麗である上、立居振る舞いも大層優雅です。女性が狐だと知りながらも

書生は終に自制が利かなくなって、間もなく白狐と深い仲になりました。

2か月程して柳書生はいよいよ古里へ帰ろうと心を決めました。書生の決意を聞いた白狐は一緒に帰りたいと言いました。

「私を連れてお帰り下さいませ。私はあなた様の妻になりたいのです」

「それは嬉しいことだが、私は貧乏書生なので、帰る旅費も結婚するお金もないのだ」

「その様なことはお任せ下さいませ。私が用意いたしますわ」

2人は3日後に旅立つ約束をしその日は別れました。

3日後、書生は白狐と約束した城門のところに行ってみますと立派な馬車二輛がそこに停まっていた。白狐の姿が見えず柳書生が心配していると彼女は一方の馬車から降りて来、書生の手を取ると元の馬車へ乗り込みました。

「どこからこんな立派な馬車を調達してきたのか？ そ

れにしても馬車は2輛もいらないでしょう」

白狐は笑いながら

「わたしは狐の精ですから、欲しいものがあればなんでも手に入れますわ。馬車は、私たちが乗るものと荷物を運ぶものとの2輛必要でしょう」

実は、二輛目の馬車には二人が一生涯の間で使いきれない財宝が載せてあると、柳書生は後で白狐から聞きました。

4、5日後、2人は無事に柳書生の古里に着きました。しかし、柳書生の両親は既に亡くなっておりましたので二人は結婚式を挙げることなく、白狐を鈴児と呼んで一緒に穏やかな生活を始めました。

(続く)



満柏 画

後生畏る可し

私の調べた諺・慣用句 41

三澤 統

例えば、ある会社に若者が沢山入社し、どの新社員も成績優秀で、配属された職場では、やる気まんまんであったとしたら、そんな職場の先輩や上司達がいう台詞は「今年の新社員たちは皆凄いな、このぶんだと、“後生畏るべしだ”ではないでしょうか。ということで、今回はこの慣用句を調べてみました。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲ 小学館 デジタル大辞典：

「後生畏る可し 『論語・子罕編^{しかん}注』から』後進の者は努力しだいでどれほどの力量を身につけるかわからないので、おそれなければならない」

▲ 小学館 中日辞典：

「后生可畏(hòushēngkěwèi) 後生畏る可し。後から生まれた者は先輩を追い越す力を持っているのでおそれるに値する」

孔子が諸国を巡り歩いていた折に、ある日道端で三人の子供たちが遊んでいました。三人の内の二人は、遊びに夢中でしたが、残りの一人はそば

で黙って立っているだけでしたので、孔子は不思議に思ってその子に

「君はどうして皆と一緒に遊ばないの？」

と尋ねました。するとその子は大まじめに答えました。

「ふざけ合って喧嘩になったりすると怪我をするかも知れないでしょ。そうじゃなくても着ているものが破れたりするし。だから僕は一緒に遊ばないんだけど、おじさん、おかしいと思う？」

やがてその子は一人で泥を捏ねて道の真中に砦のようなものを作り上げ、その中に座ってそのまま動こうとしませんでした。そのため孔子が出発しようとしても、その砦のようなものが邪魔で道を通れませんでした。

しばらく待っても子供は砦の中に座ったままでしたので、孔子は待ちきれなくなって子供に尋ねました。

「君はそこに座ったままだけど、どうして私の車を通してくれないのかね」

すると子供は

「僕は車が砦をよけて通るといのは聞いたことがあるけど、砦が車をよけるなんて聞いたことがないよ」

と答えました。

それを聞いた孔子は吃驚して、こんな小さい子供が、このようなことを言うのは実に驚きだと思い、称赞の気持ちを込めて子供に言いました。

「君はまだこんなに小さいのに、もうそんなことを知っているなんて凄いなあ！」

すると子供が答えました。

「人から聞いたけど、魚は生まれてすぐに泳げるし、兎も生まれてすぐに地面を走れる。馬も生まれてすぐにお母さん馬について野原を駆けることができるんだってね。でもそんなのは自然じゃない？びっくりするほど凄いことじゃないと思うけどな」

子どもがいうのを聞いた孔子は思はず感嘆して言いました。



満柏 画

「その通りだね、子どもの君がもうこんなに賢い
 のだから、これから一生懸命勉強したら将来どん
 なに優れた大人になるのだろうね。おじさんも負
 けないように勉強しなければならないね」

孔子は、「未来あるもの達の可能性を畏るべし」
 と傍らのものに呟いたのでした。

〈注記〉

論語・子罕篇 し かん へん この篇は、第一章の「子罕に利を言う。
 命と与にし仁と与にす」の最初の句をとって篇名とし
 たもの。孔子の言行を弟子たちが記述したもの、弟子
 たちが孔子の人格について論じたもの、などが含まれ
 ている。

(出典：中華成語故事大全 http://blog.sina.com.cn/s/blog_4cabd2fc0102e0jf.html)

詩人尹世霖の童詩の世界 ⑭

金子總子・訳

hǎi tān 海 滩

xià tiān de hǎi tān
夏 天 的 海 滩、

shì hái zǐ de lè yuán
是 孩 子 的 乐 园。

yě mǎ yī yàng dì bēn pǎo
野 马 一 样 地 奔 跑、

xiǎo lù yī yàng dì sā huān
小 鹿 一 样 地 撒 欢。

bèi liū — shuāi yī jiǎo
背 溜 — 摔 一 跤、

tuō qiú — sài yī pán
托 球 — 赛 一 盘。

tiào jìn hǎi lǐ fān shí gè gǔn
跳 进 海 里 翻 十 个 滚、

zài pū xiàng mián ruǎn de xì shā tān
再 扑 向 绵 软 的 细 沙 滩。

qǐng tài yáng yòng niǎo jīn de fěn mò
请 太 阳 用 鸟 金 的 粉 末、

bǎ zhōu shēn dù de guāng shǎn shǎn
把 周 身 镀 得 光 闪 闪。



砂 浜

夏の砂浜は

こどもたちの 楽園だ

野生の馬のように 駆け回り

小鹿のように 跳ねまわる

後にすべり——ステンところぶ

トスをあげて——サアひと試合

海に飛び込んで

ゴロゴロころげまわり

また 柔らかい砂浜に向かって

とびこんでくる

お日様にお願いして

鳥に金色の粉を撒かせ

体の周りを

金色にキラキラ

光りかがやかせるのだ



三日目(9月27日)の朝が来た。5時に起床して荷物をまとめてチェックアウトし乗船場に歩いて向かう。さほど遠くないので6時前には港に着いた。

小さな島なのである程度は歩いて用が足りる。友人がまとめて乗船券を買ってくれるので、候船大庁(乗船待合室)でのんびりする。6時半ころ船に乗り込んだ。例の潜水艦に似たフェリーである。船体に「海華」と書かれている。昔見た「海底二万哩」という映画を思い出した。6時35分出航、10分足らずで対岸の「朱家尖」に着いた。あっという間の普陀山旅行であった。とても名残惜しくなった。

二泊三日の短い旅ではあったが、この間一人の日本人にも会わなかった。中国には観光地は星の数ほどあるが、是非この小さな島を見ることをお勧めしたい。友人が一度は行って見る価値がある、と言っていたが私もそのように思った。まだまだ見る所はたくさんあるようだが、初めて行かれる方はこれまで紹介したところをまず見られると思う。

ところで「普陀山」という名は、観音菩薩がお住まいになるという補陀落(あるいは補陀落山)に擬せられ、名前の由来もここから来たものである。補陀落は、サンスクリット語(古代から中世にかけてインド、東南アジアで用いられていた言語)の「ポタラカ」の音訳である。伝説では、インドの遙か南



普陀山からのフェリーが着岸した小家尖港風景

の海上にある八角形をした山(島)という。西遊記で有名な玄奘三蔵の「大唐西域記」にはこの山がインドの南に実在すると書かれてあるそうだ。チベットも観音信仰の地として知られているが、西藏自治区の省都ラサにあるポタラ宮(布達拉宮)の名前の由来も「ポタラカ」から来ている。観音信仰は日本にも広く伝わり、いくつもの寺院が補陀落山を山号にしている。和歌山県的那智勝浦町には、補陀落山寺という名称の寺院まである。

さて上海行きのバスは、港から少し離れたバスセンターから出るというのでタクシーに乗った。着くとかなり大きな建物である。壁面に「普陀旅游集散中心」と書かれている。なぜこのような車もさほど通らないところにバカでかい建物が必要なのであろう。「集散」という文字が入っているが日本の感覚では違和感がある。例によって友人がまとめて切符を購入してくれるので大助かりだ。時間が来たので改札を通り、バスがたくさん駐車している広場に出た。我々の乗るバスは2階建ての大きなバスだ。定員は39名とある。全車指定席で座席はゆったりとしており、その上制服を着た若い可愛らしいガイドまでいる。

なぜ来た時のバスとこうまで違うのか不思議で狐につままれたみたいである。友人に訊ねたが今一つ分からない。でも逆でなくてよかったと思った。我々は、バスの中ほどの階段を昇って2階席に座った。階段の壁を見ると、「文明、今天你做到了



上海・豫園商店街の雑踏



サービスが素晴らしかった2階建て高速バス

吗?」(あなたは今日礼儀正しいことができましたか?)というステッカーが貼ってあった。マナー向上に取り組んでいるのか、とほほえましくなった。

バスは7時30分に発車した。朝食を食べていないので早速昨夜買い込んだバナナやミカン、リンゴを食べ始めた。すると間もなく件のガイドさんがプラスチック容器に果物を入れたものとビスケットなどが入った袋を配り始めた。中にはおしぼりまで入っている。その後飲み物を出すと言うのでコーヒーを頼んだ。ジャスミン茶もある。ガイドさんは感じがよくサービスは一級品と言っている。138元(当時のレートで約2300円)のチケットであるが安いものだ。これまで中国国内でいくつかの交通機関を利用したが、こんなに気持ちよく乗ったことがない。終わりよければ全てよし、というがこれも観音菩薩のご利益かもしれない。

バスは、12時頃上海市内を流れる黄浦江に架かる「南浦大橋」のインターチェンジのそばにあるバスの終点に無事到着した。昼食は友人の知っている四川料理店「麻辣香鍋」で摂る。食後は、上海旅行の定番の豫園に行ってお土産を買うことにした。2010年の上海万博の時に来たが、その時以来で懐かしい。今日も快晴で、9月末だということにとっても暑い。買い物はそこそこにしてアイスクリームを買って小休止。この後、黄浦江をくぐって対岸の浦東新区にある有名なテレビ塔「東方明珠」に向かった。その後9月24日に泊まったホテルに帰り、預けておいた荷物を受け取った。もう明日(9月28日)は、日本に向かうのである。

4回にわたって「上海市と普陀山」を紹介してき



上海・浦東地区の代表的な高層ビル群(真中の細長いビルが「上海タワー」)

たが、最後に上海の最新の状況について触れて終わりたい。それは浦東新区にある中国一のビルで、ドバイにある「ブルジュ・ハリファ」(高さ828m、160階建)に次ぐと思われる「上海タワー」(上海中心)と呼ばれる建物についてである。

黄浦江を挟んだ兩岸は、極めて対照的な光景で最も上海で有名なところである。東側が高層ビル群で現代中国を代表するエリアであり、西側は外灘(バンド)と呼ばれるエリアで150年から160年前の租界時代に建てられた低層ビル群であるのはご承知の通りである。上海タワーは東側の高層ビル群の中によっきりと起ち上がっている。これまでの超高層ビルと言えば、上海環球金融中心(高さ429m、104階建て)と金茂大廈(高さ420m、88階建て)であった。

両ビルは極めてユニークな設計で知られている。前者は2013年現在、世界第5位(中国では第1位)の高さを誇り97階~99階部分に台形の穴が開いていて、ちょうど栓抜きに似ている。後者はビル全体が仏塔の屋根のようにリズムカルに、階数が上がる毎に細くなる尖塔状の建物でとても印象的である。西安にある大雁塔や小雁塔をイメージしたように見える。

さて上海タワーである。この超高層ビルは二つ

のビルより頭一つ、二つ抜きんでている。ガラス・カーテンウォールで外側は覆われていて、螺旋状にねじれながら高くなっている。これまた印象的な外観である。高さは何と632mで128階建てなので今のところ世界第2位であろう。一人間はどこまで高く造りたいのであろうか。私にはつまらない見栄に思われる。地震がない地域ということなのであるが、この世で「絶対」という言葉ほどあてにならない言葉はない。「タワーリング・インフェルノ」という映画のように火災になったらどうするのであろう。飛行機が激突したらどうなるのだろう。心配の種は尽きない。これら超高層ビルには決して登りたくない。

この三つのビルはお互い奇妙な調和を保ち、高さ比べをしている。ちなみに日本での超高層ビルで比べると上記の3ビルの大きさがわかる。日本で2番目に高い「横浜ランドマークタワー」は1993年に完成したが、高さは296m、70階建てである。地震国であるし、これ以上の高さのビルはいらない。東京スカイツリーで十分である。

私が昨年9月に行ったときには、「上海タワー」は最上階あたりを残し、完成に近づいているところであった。そして12月末に完成し、上海の名所がひとつ加わることになった。これからも上海は訪れるたびに新しい顔を見せてくれるであろう。

9月28日の朝を迎えた。今日も天気がいい。8時頃チェックアウトしホテルの玄関を出た。するといい香りがする。見ると、出たところに二本の大きな金木犀の木があり、金色の花を満開にしている。別れを惜んでいるようだ。あっという間の5日間であった。(終わり)

◆「中国・城市めぐり」を終えるにあたって

私の「中国・城市めぐり」は7月号で43回目を数えます。このシリーズは主として私が大連に赴任していた時、連休を利用して旅行した都市について書いたものです。書くに当たってはガイドブックに掲載されていない情報やあるいは視点を変えたりして書いてきたつもりです。今回で一巡しましたので終わりにしたいと思います。長くお付き合いして頂きありがとうございました。

「日本の歌を美しく歌おう！ ‘わんりい’ ボイス・トレの会」へどうぞ

田井 光枝

「日本の歌を美しく歌おう！ ‘わんりい’ ボイス・トレの会」が開催の「歌と語りのライブ・花は咲く」は好評で終わり喜ばしいことです。

講座の前身は、現在四川音楽大学で声楽の教授として活躍の趙鳳英先生指導による「中国語で歌おう！会」で、この講座は2004年に始まり、趙先生が2010年に四川音楽大学講師として招聘されるまで6年間続きました。趙先生の招聘期間は1年又は2年とのことでしたので講座を休会にして帰国をお待ちすることにしました。しかし、趙鳳英先生を迎え入れた四川音楽大学は、おそらく、趙鳳英先生の歌唱力と指導力を正當に評価したのでしょう。専任教授のポストで中国声楽界の後進の指導をゆだねることを決めたようで、結局帰国がないままに歳月が過ぎました。

「ならば」と、趙鳳英先生の指導で歌う楽しさを知った仲間たちが、歌手として、ボイス・トレ講師として活躍中のEmme講師を迎えて、今度は日本在住の

外国の方たちとも一緒に歌える方向へと、講座の名前にもわざわざ「日本の歌を美しく歌おう！」を加え「ボイス・トレの会」を始めました。

物心ついて以来、自分の「音痴」を自覚している私は、実は「引ける気持」があったのですが、始めてみれば、なるほど全身運動で身体から力を抜いて自分を楽器にしてしまう境地に自由な発声の源泉があるのを知りました。また、1ヶ月にたった1回の活動ながら、思いきり声を出すことが、日常的なストレス解消にこんなに効果的だとは思っていませんでした。家に居れば物言うことも少なく腹ふくるばかりですから当然かもしれません。

残念ながら音痴の克服まではまだですが、声が出る楽しさを知って、独唱ではないものの、何と他人の前で歌うことが我が人生に来ようとはです。

皆さん、ご一緒に如何ですか？



大同の九龍壁

鄧仁有

皆様、これから九龍壁についてご案内します。

九龍壁というと、先ず北京の北海公園の中にある九龍壁が思い出されますが、あにはからんや山西省大同城内には、その2倍近い大きさの九龍壁が建てられています。明の初代皇帝朱元璋は第十三王子朱桂を代王に任じ、大同に王府を築き北方の異民族に対する守りを固める役目をさせました。この九龍壁はその代王朱桂の邸宅前に建てられた障壁です。明の洪武二十五年(1392年)、北海公園の九龍壁より350年あまり早く作られました。

大同の九龍壁は幅45.5m、高さ8m、厚さ2mあり、426枚の彩色瑠璃タイルを龍の形に組み合わせで作られています。龍と龍の間は水草や山石などのデザインで繋いであります。大同の九龍壁は北海公園の九龍壁に比べて異なる風格があります。龍壁の真ん中の龍の作り方はおおらかで、荒っぽく、それでいて洒脱で、全体が力強く、人々の目を引きまします。一方、北海公園の龍壁の真ん中の龍は清の時代の特徴があり、精細です。

全体の構図から見れば、大同の龍壁は九龍が波濤の雲海の中を躍動し水に戯れるデザインで、真ん中の龍を中心とし、その左右対称的に薄黄色い行龍(動いている龍)があり、その外側に黄色の盤龍(身体を丸めている龍)があり、さらにその外側に紫の飛龍(飛んでいる龍)があり、一番外側には座龍(座っている龍)があります。九龍の姿勢とスタイルはそれぞれ異なっています。曲がりくねったりするものも有れば、頭を上げて飛ぼうとするものも有ります。北海公園の九龍壁の構図は二匹の龍が球と戯れるもので、少し変化は感じられますが作り方から考察すると九龍の間では何らかの関わりがあっても、堅苦しく規則的なものを感じます。北海公園の九龍壁はある程度大同の九龍壁を真似して作られたものと思われるのですが、このように見れば、大同の九龍壁は龍壁のトップだと言う事が出来ます。



北京北海公園九龍壁：中国で有名な三つの「九龍壁」の一つ。長さ29.4m、高さ3.5mもある巨大な瑠璃装飾の壁で、1772年に建造された。(ウィキペディアより)



大同九龍壁：長さは45.5m、高さ8m、厚さ2mです。下部は須弥壇で、束腰の部分に獅子、虎、象、唐獅子、麒麟、天馬等の動物が彫られており、その姿はそれぞれ異なり、躍動的です。(桂林中国国際旅行社HPより抜粋)

※上の写真と下の写真は同じ縮尺です

大同には多くの龍壁が残されています。龍壁は一般に建物の障壁(目隠し塀)とされています。多くは皇宮、親王府、寺廟の入り口に建てられ、建物の荘厳さを引き立てる効果をもっています。

龍は想像上の動物で、原始社会に源を発します。古代の人々はこの世のありとあらゆる動物の中から力強さと美しさを示す部分を一つに集めて独特の姿の龍をつくりました。数千年来、この龍は中華民族の象徴となっています。また中華民族も常に自らを「龍を受け継ぐ者」に例え、誇りを抱いて来たのです。仏教教典の中で、龍は天龍八部衆の一つとされ、神通力を持って

仏法を守る者とされています。そこで龍は仏教の護法神となり、寺院山門の障壁に龍をデザインしたものが多くなったのです。

この龍壁は2001年に全国重点文物保護単位の一つに認定されました。

国際交流員として2004年から2年間、青森県に来日した鄧仁有さん。その後帰国され、山西省太原市にある旅游学院の日本語ガイド養成コースで教鞭をとられています。これから数回、鄧さんが執筆した日本語ガイド資格試験用テキストから、山西省の名所旧跡をご紹介します。

和食って、なに？

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

テレビでも、新聞・雑誌でも、何かと和食の人気をはやし立てていますが「和食って、なに？」。

2013年に「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録されたときに感じた疑問でした。当時の記憶では、京都の有名な料亭の社長がいろいろ定義を説明していましたが納得できませんでした。外国人の観光客に聞けば、鮨とラーメンが好きだといいます。鮨はともかくラーメンも和食なのでしょうか。ここでウィキペディアから「和食」を引用してみました。

『日本料理とは、日本でなじみの深い食材を用い、日本の国

土、風土の中で独自に発達した料理をいう。日本食とも呼ばれ、日本風の食事を和食と呼ぶ。米(穀類)・野菜・魚が多くの場合料理の基本素材とされており、寿司および刺身・天ぷら・蕎麦などは日本国内外でもよく知られると共に料理店はミシュランにおける評価も高い。オムライスやカレーライスなど洋食の一部も日本に定着し、一般的に食され日本で独自の発達を遂げている料理は日本国外において日本の料理として扱われることもある。ラーメンなど中国料理をルーツとする(和式)中華料理や、イタリア料理をルーツとするスパゲッティ・ナポリタンなどについても同様である』

私がここで注目するのは「米(穀類)・野菜・魚が多くの場合料理の基本素材とされており」の部分です。思い起こせば、これらの食材は縄文人の食生活と同じです。縄文文化を一言で言えば「狩猟・採集・漁撈」と定住です。縄文人を祖先とする日本人は、自然から恵みをもたらって1万数千年を過ごしてきました。今日の和食は、江戸時代に完成したといわれます。その辺のところを述べてみたいと思います。

現代の和食につながる江戸の魂

小田原北条氏が滅亡し、家康が関東に移封され江

戸城に入城したのは天正十八年(1590)。徳川幕府が成立する慶長八年(1603)、本格的な都市づくりが始まり、享保六年ごろ(1721)には人口が110万人を突破するほどの巨大都市となりました。当時のロンドンに約70万、パリは50万、北京でも70万人といわれていますから、江戸は世界最大の都市でした。

参勤交代による大名とその家臣団、地方からの出稼ぎによって人口は急膨張し、地方の文化も流入しました。江戸の巨大消費を支えるために醤油や酒、菓子類が上方より「下がりもの」として賄われていました。やがて文化文政期になると、江戸の食文化は発展を遂げ、長い歴史の中で洗練されてきた上方料理も退けるほどになりました。滝沢馬琴は「京と大阪の悪しきものとして、料理と魚」を挙げ、大阪の狂言作者・西沢一鳳も「皇都午睡」の中で「食は江戸一、大阪二、京三」と記しています。上方人からみても「江戸の料理」は日本一でした。

江戸っ子は職人や小商人が多かったのです。その一般的食事は身体が元手ということもあり、貧しくとも食事にだけは銭惜しみをしませんでした。式亭三馬は「当世浮世風呂」の中で、長屋の住人は「日に三度コメの飯を三膳ずつ頂いている」と述べています。もちろん白米で地方とは比較にならない贅沢。菜は「納豆・煮豆・豆腐・海草・干し魚」などを好みました。

「米のうまみ」が味の基準

日本人の味覚の基本は、米に含まれているでんぷん質の「甘味」です。「米の甘味」を引き立てる副食物は、塩辛いもの・酢っぱいもの・辛いもの・苦いものなど。日本で稲作が始まるのは、三千年ほど前の弥生時代ですが、それ以来一貫して「米」を主食とすることは、現代まで続いています。

江戸のご飯

江戸町人たちの朝は、炊き立ての白いご飯と味噌汁で始まります。味噌汁は納豆汁が普通でした。「叩き納豆」という便利なものがありました。包丁で叩いた納豆に、青菜と角切りの豆腐が添えてあり、火にかけた鍋に味噌と一緒に流し込めば、即席納豆汁が出来上り。これは、豆腐屋、シジミ売り・煮豆屋・佃煮やなどの総菜屋などのように行商が町内を回ってくる

という便利なシステムに負うところが多かったようです。

江戸では朝一日分の飯炊きをしましたから、昼と夜は冷や飯です。上方では昼に飯を炊くので夜と翌朝は冷や飯となります(幕末の書・「守貞漫稿」による)。

「白いご飯」は、江戸や大阪のような大都会だけで地方では、麦飯が当たり前でした。麦以外では粟・ひえ・きび・大豆の類を混ぜ込んだ「かて飯」が日常食でした。

健康にいい「雑穀食」

日本人は縄文時代より「雑穀雑炊」の主食文化を形成した民族です。「古事記」によると五穀は「米・麦・粟・大豆・小豆」を言ったそうです。現代の栄養学で見ると、穀物でカロリーを得、大豆でたんぱく質、小豆でビタミンや抗酸化成分を摂取するという合理性があります。更に粟や黍で作った餅や団子は高級菓子として人気がありました。

醤油は魔法の調味料

一滴の醤油が味をよくします。現在、醤油は世界の調味料として使用されています。醤油には魚の生臭みを消すという特技があります。「日本料理」の主役である魚も、醤油がなかったら、その魅力も半減したでしょう。「濃口醤油」が江戸で普及するのは、江戸中期の享保のころからです。それまでは上方の薄口醤油が下ってきました。

醤油は、すでに戦国時代に作られていましたが、商品化したのは紀州。江戸初期に紀州の漁師によって、銚子に伝えられました。銚子や野田の濃口醤油は元禄(1688～)には江戸に進出し、薄口の上方醤油を駆逐しました。文化・文政時代、新しく形成されつつあった江戸の味覚が濃口醤油によって完成されました。江戸前料理の「華」といわれる握り鮓・天ぷら・うなぎの蒲焼・肉鍋・どんぶり物などはこの時代に誕生。江戸前料理は、近くの海から水揚げされるイキのいい魚介を素材にして、あまり手を加えないで、持ち味を引き出す「生地料理」です。素材の味を引き出す上で、醤油の味と香りが果たした効

果は計り知れません。

江戸は武士と職人の町。筋肉を使う社会でしたから、たくさん穀類を取る必要がありました。味噌・醤油を使用した辛口の副食物がほしくなるのは、生理的に必然でした。

出汁(だし)を用いた日本人の知恵

「うまみ」のもとにはアミノ酸。日本料理の素材は淡泊なので味をつける必要があります。味噌・醤油という大豆発酵食品系は、そのままでもうまみが、昆布や魚、干しいたけといった乾物系の出汁を加えると、アミノ酸の相乗効果により、更にうまみとコクが出ることを昔の人は知っていました。江戸は鰹節、上方は昆布。鰹節は江戸初期にできましたが、その原型は平安時代に出現しています。鰹は古くは「堅魚(かたうお)」と書き、海から離れた都では干し固められた堅い魚。神社の棟木の上に並べる丸太を「堅魚木」と呼ぶのも、屋根の上に鰹を並べて干していた時代の名残りです。鰹節のうまみはイノシン酸、その他各種ビタミン、カルシウムなども豊富に含む不老長寿食です。鰹節のイノシン酸は味噌のグルタミン酸と交わると濃厚なうまみを出します。江戸っ子好みの味です。

昆布は北前船で大量に大阪に運ばれました。昆布のうまみ成分はグルタミン酸。穏やかな味で素材の持ち味を引き立てます。

酢と日本料理

塩が調味料として使われ始めたのは、旧石器時代。次いで古い調味料は「酢」でしょう。今で言う柑橘類の「ぼん酢」です。「醬(ひしお)」はモロミ状のもので醤油や味噌のルーツのようなもの。醬酢は現在の「二杯酢」。魚介類は酢味噌、しょうが酢、わさび酢で食べることが多く、醤油が普及する江戸時代中期まで続きました。

文政年間(1818～)握り鮓が江戸・両国で出現しました。すし飯の酢は甘味が必要ですが、当時の砂糖は高価で使えません。そこで探し出されたのが、尾張・知多半島の酒粕を原料とする「粕酢」です。粕酢には、ほのかな甘さがあります。酢には殺菌作用もあり、活き魚による食中毒防止にもなりました。

江戸時代に生まれた「おかず」

江戸っ子は、ご飯・味噌汁・漬物、そして「おかず」というバランスの取りやすいスタイルを生み出しました。「和食」とは江戸で生まれた「江戸っ子食」。江戸は急速に発展したために慢性的な人手不足となり、出稼ぎの人々が全国から集まりました。ほとんどが男ですから極端な嫁不足。料理は簡単なものしか作れません。そこで繁盛したのが「菜屋と煮売屋」と呼ばれ

たおかず屋です。江戸っ子は副食物を「お菜」とか「おかず」といいました。煮売屋は油揚げ・にしんの蒲焼・さばの味噌煮・焼きいわし・八杯豆腐・昆布の油揚げ・きんぴら・切干大根のはまぐり煮から、煮豆・小松菜のおひたしまで売っていました。

観光の経済効果もいいでしょうが、和食が持つ「歴史の物語」を知ってもらい、日本文化の奥深さを理解して貰うことも大切なのではないのでしょうか。

雲南にまつわる私の思い出

岩田温子

私は現在、松本市と上田市に隣接する長野県ちいさな小県郡青木村に住んでいます。今年の8月になんと、「わんりい」と最近、関わりができた認定NPO法人・日本雲南聯宜協会が雲南の少数民族の大学生と日本の大学生30人を連れて、青木村で数日間スタディツアーを行う事になりました。なんとなく不思議なご縁を感じ、微力ながらなんらかのお手伝いをさせて頂こうと思っていますところでした。

さて、20数年前の話ですが、その頃、原宿にあった馬里邑美術館で「中国雲南少数民族服飾芸術展」が開催された事がありました。おそらく日本で雲南省に住む少数民族の衣装展は初めての公開だったのではなかったでしょうか。雲南省民族博物館から借り出された様々な民族の衣装は美しい色彩、精緻な刺繍、アップリケ、銀細工や宝貝をこれでもかと縫い付けた装飾スタイルなど、どれも息を呑んで見つめる他に素晴らしいものでした。「世の中にはこのような美しい物を作る人達がいる」、「着ている人達がいる」、驚きと感動はやがて、「どんな所に住んでいるのだろう」、「どんな暮らしをしているのだろう」、「行って自分の目で見てみたい」という思いに変わりました。その願いは間もなく実現することになりました。

同じ思いの人達が集まったツアーが実施され、雲南省の省都・昆明と当時外国人に解放されたばかりのタイ国境に近い西双版納シーサンパンナを訪れる事になりました。昆明から飛行機で西双版納ジンホンの中心の景洪行きました。飛行機を下りて目に入った光景は昆明のちょっと曇ったような空気とは違い、明るい透明感の有る空気の下で色とりどりの陽傘をさした女性が歩いている姿でした。彼女達はこの地域に多く住むタイ族でした。彼女たちの服装は身体にぴったりとした上着と長いスカートで、アクセサリと言えば髪に挿した花簪のような物だったような記憶があります。

優しい色遣いの服と傘と周りの草木の緑とが一緒になり、花が咲いたような明るく、穏やかな美しさを感じました。景洪からメコン河を船で下り大きな仏教寺院を見に行った途中、河岸に沿って小さな集落が点在し、時には山肌から焼き畑を行っている煙が立ち上る風景を目にしました。平地にあるタイ族の集落と比べると耕作地が狭く、家の造作も粗末な感じを受けました。ジンポー族や愛尼族の集落だという説明を受けたような記憶があります。その旅の目玉であるタイ族の正月行事である水掛祭りがおこなわれる日がやってきました。景



1990年馬里邑美術館「中国雲南少数民族服飾芸術展」の入場券

洪のあちこちで皆が色のついた水を掛け合っていました。メコン河では勇壮な龍船競争もおこなわれました。そして、やがて夜になると町の中心広場で踊りが始まりました。その会場にはタイ族以外の近隣に住む少数民族の人々もそれぞれの民族衣装を着てやって来て踊りの中に加わっていました。期待通りの、展覧会で見たような銀の装飾のついた頭飾りや服装で、今は詳しいことはすっかり忘れてしまいましたが、日本からはるばるやって来た甲斐があったと胸をドキドキさせながら踊る人たちの輪の近くについて、ちらちらと遠慮がちに見た覚えが有ります。

西双版纳から昆明に戻ると石林という観光地へ行きました。しかし、そこではサニ族というクロスステッチをよくする女性達が自分たちの作った刺繍の袋物売りつけようと待ち構えていて、とても観光を楽しむどころではありませんでした。その後はどこの昆明の観光地でも彼女達に集団で取り囲まれ、あまりのしつこさに恐怖感さえもちました。結局根負けして3枚・千円の刺繍がされた財布を買いましたが、そのうちの1枚は今でも愛用し懐かしい思い出に変わりました。サニ族の女性達は打ち合わせのある上着とズボン、更に可愛らしい房飾りをたらしめた円形の帽子をかぶっていたように記憶していますが、当時はあまり怖さに一刻も早く立ち去りたいと思うばかりで、彼女たちが身に着けていた衣装をしっかりと見ませんでした。今になって思えば残念でした。

この旅の後、チベットや四川省との境界近く、独特の文化と文字をもち、古い街並を残しているといわれていた麗江や主として白(ペー)族が住んでいる大理へ行く計画を立てましたが、その旅の直前に麗江が大きな地震(1996年)に見舞われ、残念ながらそれ以降は雲南への旅は実現していません。

2008年にNHKのBS放送で「茶馬古道 もう一つのシルクロード」というドキュメンタリーフィルムが放映されました。それによると麗江は、かつては雲南の南、プーアール地方で作られる茶葉や四川省の塩などの一大集積地で、ここから馬やロバを使ったキャラバンが5000キロも離れたチベットやインド・ネパールへとヒマラヤの大峡谷に沿った道を

通って交易にでかけたそうです。前漢時代の記録にも交易の話が出ているという事ですので、紀元前から交易はすでにあつたわけで、人間の営みの凄さに感動と畏敬の念をおぼえました。今はもうトラックによる輸送が大半ですが、それでも車が入れない険しい地形にある集落などには今でも馬による輸送がおこなわれているそうです。民族衣装に端を発して雲南の少数民族の人々の暮らし方へと関心は深まりましたが、長い歳月が経ち、雲南の少数民族の人々の暮らしは大きく変わった事でしょう。

思いがけず、今度は彼の地の若い人達が私の住む場所へ来てくれる事で、その後のたくさん話を聞かせてもらいたいと私は今からとても楽しみにしています。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

'わんりい'は、いつでも新入会を歓迎しています。
新年度(4月)入会年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 'わんりい'
途中入会申し込みの方は、入会時期によって割り引かれますので、下記へお問い合わせください。

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい'わんりい'をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

花と温泉を求めて—韓国低山ハイキング(上) (2015.5.27～6.3)

関根 茂子

昨年9月に出かけた韓国低山ハイキングでは、太白山(テペグサン)に雨で登れなかった。というより、「また、くればいいや」と釜山博物館見学に即、切り替えたのだ。どうせ行くなら、今度はツツジの咲いている時期に登りたいとS姉に切望していたところ、この5月末に出かけることになった。もう一つの山は徳邱温泉(ドクオンチョン)から登れる鷹峰山(ウンボンサン)、もちろん温泉泊りのプランだ。かくして昨年のメンバー5人での再び韓国の山旅が始まった。

◆5月29日(雨) 今回は大韓航空KE704便=成田13:55発で仁川(インチョン)17:30着(航空券往復@24,900円) 成田空港第1ターミナル北ウィングからのフライトだった。

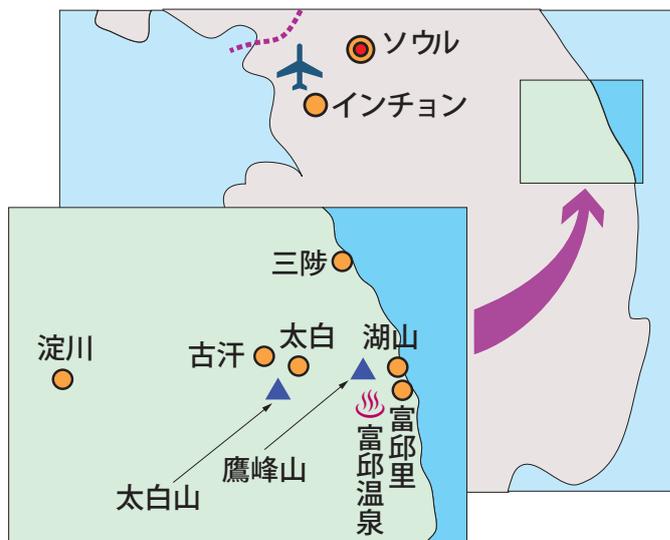
昨年は格安航空便搭乗で機内サービスは水だけしかでなかったが、大韓航空便の今回はまともな昼食が提供された。到着後両替すると円安でレートは10,000円=83,000ウォン(当時は100ウォン≒12円)にしかならなかった。

空港の案内カウンターで予約のホテル(仁川ゲストハウス2泊@6000円)からの依頼した迎え車でホテルへ。この宿は6階の1部屋が事務所、部屋は2階だった。空港から近い10階建てのオフィスビルの空き部屋を利用?と思われる。ビル1階の飲食店街で夕食に水餃子(@6,000ウォン)をとる。

◆5月30日(小雨後曇) 地下二階駐車場に集合(8:



チョウセンツツジ



50)、ほかの宿泊客といっしょに車で仁川空港へ。9:30発仁川=太白は高速バス(@36,900ウォン)に乗車。バスは九里—原州(ウォンジユ)12:00—堤川(チェチョン)12:55—古汗(コファン)を13:55通過一峠をトンネルで抜け見覚えの太白バスターミナル14:30到着した。まずは昼食と手近な食堂に入るがメニューはハングルのみで中身が不明。昨年Tさんが食べて「野菜がいっぱい入っていた」という天山鍋(@7,000ウォン)を注文したが、これは外れだった。

韓国語の分かるS姉とK嬢で、日本語が話せる女の子がいた鉄道駅前の案内所に出向き、今夜の宿や明日の交通手段を聞いてくる間、言葉の分からない私は荷物番となる。

今宵の宿は昨年と同じ東亜(トンア)モーター(オンドル1部屋55,000ウォン)泊となる。お湯をためた風呂に入れたのはうれしい。夕飯に前回の昼食にチヂミを食べた店にいくが、夜は飲み屋になっていた。そこで夕食をとった店に入ると、店の人は私たちを覚えていたようだ。ここでまた天山鍋(@7,000ウォン)を食べる。昨年と同じく焼きサバが一番おいしかった。

◆5月31日(晴) 不要の荷物を宿に預けて、バスターミナルへ。8:00始発の太白山登山口のタンゴル行きの路線バス(@1200ウォン)を待っているうちに1台に5人乗せてくれて10,000ウォンで行く

というタクシーがあった。それで西奥の柳一寺(ウィルサ)登山口から登ることになる。車は昨年、バスが入ったタンゴルの分岐を通り越して、さらに西に走り登山口7:38着。10,000ウォンのはずがメーターは15,500ウォンを示していて言葉が不自由な私たちはどうしようもなくメーター料金を払わざるを得なかった。

登山道の途中で右に入るコースがいいと薦める運転手に見送られて7:50登山口を歩きだし、小沢沿いのオドリコソウ、キンポウゲなどが目につく林道状の道を進む。自家用車が停まっている駐車場を過ぎるとすぐ右手に小道が延びている。足元にラショウモンカズラが咲き、頭上にはマタタビの白い花がかわいい緑滴る小道をじくざぐに登っていく。出発から50分のゆるゆる歩きで尾根に乗り上げひと休み。

石がごろごろした尾根道にはゴヨウマツが多い。休憩地点から30分で到着の1275m峰の右手の岩上が見晴らし台になっていた。下がるとさっき分けた林道をそのまま上ってくる広い登山道と合流した(9:20)。ここには休憩所もあった。今日は日曜日、登山者が次々に登ってくる。

石段状に整備された登山道にはロープが張られ、林の下にオオサクラソウがたくさん咲いていた。マイヅルソウやツマトリソウも出てくる。お目当てのツツジも出始める。柵に囲われたイチイの大木と説明板(10:00)の先からは、そこそこに韓国で朱木(チュモク)と呼ばれるイチイの木が群生していた。冬の太白山はイチイの樹氷見物が売り物だと観光パンフにあった。またイチイは太白市の木でもある。

ここのツツジは、輪生する楕円形の大きな葉にピンクの大振りの花をつけて見応えがあった。帰国後、ネットで調べると漢字の「躑躅」を韓国語で「チョルチュク(철쭉)」と読み、これが日本に入ってクロフネツツジ=黒船躑躅になったという。「チンダルレ」というツツジもあり、こちらは日本のゲンカイツツジ=玄海躑躅の母種だそうで。06年5月連休にハンラ山で見たツツジ群落はこれだった。

ツツジの群落の中を歩くうちに將軍峰(シャングンボン)1567mに到着(10:35)、石を積み上げた円形の祭壇があるここが標高では最高地点だ。さらに



オオバヤマレンゲ

南になだらかにツツジの原は続き、太白山の大きな石柱と儀式を行う天祭壇がある1560m峰に着く(10:40)。昼食休憩中も後から後から登山者が現れ大賑わいだ。行く手に1547mのプセ峰へとつながるたおやかな尾根が見えるが、15時にはバスターミナルに戻っていなければならない。最短路で下山にかかる(11:30)。こちらはゆるい段々道で、下がるにつれてツツジが咲き終わりリンゴの花が咲いていた。

湧水で喉を潤し(11:50)、万景寺の前を通過して林道状のザラザラ道を下って尾根から沢沿い道へ分岐に着く。ひといきいれて右手に下りること10分ですぐでタンゴル溪谷に下りつく(12:40)。谷沿いにはオオヤマレンゲにそっくりの白い大きな花を下向きにつけた木があった。オオヤマレンゲは関東地方ではめったに見られない。木の下に立ち止まり、咲いている花を見つけては「きれい、きれい」大騒ぎする私たちを行き交う人は怪訝そうに見て過ぎていく。

後で調べてみると、あの花は朝鮮半島から中国東北部の最南部にかけて分布するオオバヤマレンゲだった。オオヤマレンゲとオオバヤマレンゲはおしべの色が違い、オオヤマレンゲのおしべは薄い橙色で、オオヤマレンゲは深紅色と書いてあった。確かに真ん中に赤いおしべが目立っていた。

1時間歩いて昨年見覚えの登山口広場に着き(13:50)、バス停に向かうと発車まで20分も待つようだ。タクシーがいるので見に行くと朝の運転手が迎えに来ていた。バスターミナルまでメーターは7,800ウォンだったが、10,000ウォンをはずむ。

(続く)

フィリピン滞在記 ⑦---フィリピンはTATTOO(刺青)文化天国か!?

為我井輝忠

フィリピンを旅行していると、実に多くの人々がタトゥーをしているのを見かけるが、実に驚かされる。世界中どこへ行ってもタトゥーをしている人は多いが、そのほとんどはファッション的なもので、特に若い人々が好んで自分の身体にタトゥーを入れている。西欧諸国では若い女性の間で人気があるようだ。

しかし、流行というものではなく、伝統的に自らの身体に種族の「誇りや男らしさを」表すためにタトゥーをしている多くの民族がいる。特に、アジア、アフリカ、南太平洋の国々では今なお行われているところがある。私が訪れた国々の中ではタトゥー文化のある国々が多いような気がする。例えば、フィジー、ニュージーランド、タイ、ミャンマー、スリランカはもとよりフィリピンでもそれらが顕著に見られる。

ある時フィリピンの雑誌を見ていたら、この国には伝統的にタトゥーをする習慣があり、特に山岳民族の間では民族の誇りを表すために全身にタトゥーを入れると書かれていた。今でもそのようなところがあるのだと大変驚いた。しかもフィリピンで最後の(否、世界で最後の)タトゥーアーティストとであるFang-Od(ファンオド)さんという96歳になる女性がいると紹介されていて、ぜひその場所へ行ってみたいと友人に相談すると、「今でも首狩り族がいるかもしれないぞ。3時間は歩かなければならない」などと脅かされてしまった。最初友人は気乗りしないようだったが、次第に興味を持ち始め、付いて来てくれることになった。

私が住むサン・フェルナンドからバギオ、バナウエ、ポントック、タボック、ブスカランへとバスを乗り継いで出かけたが、1日では無理なので途中でバナウエに2泊した。タボックでは途中までし

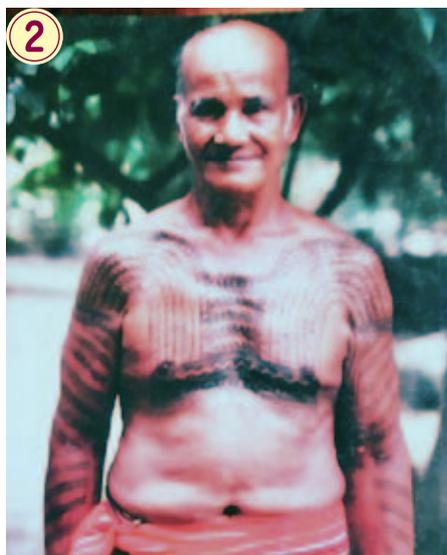
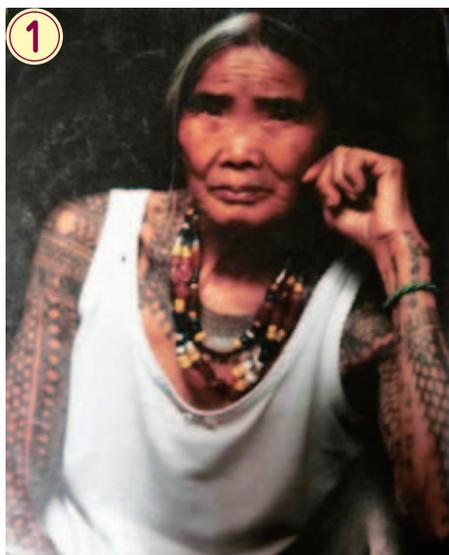


今なおタトゥーが盛んに行われている、カリンガ州ブスカラン村

かバスが行かず、やむを得ずバス停の近くにいた人にオートバイに乗せてもらい(勿論有料で)、その後偶然、途中でこれから訪ねる予定のブスカラン村の男性にお会いし、この男性の案内で2時間歩き、やっと着くことが出来た。ブスカラン村に来るころには日はすでに暮れかかり、案内してくれた男性の家に2晩泊めていただいた。

ブスカラン村は昔から首狩り族の村として知られているが、もちろん今はそんな習慣はなくなっている。しかし、タトゥーをする習慣だけが残ったようである。この村は世帯数100戸、人口1000人ほどの小さな村である。伝統的な高床式の住居が多く残されていて、そんな家の一軒に泊めていただいた。村は800メートル級の山の中にあり、そこまで行くのは前述したように大変なものであったが、さすがタトゥーの村と知られるだけあって、フィリピンはもとより世界中からタトゥーを求めて多くの人々が訪れていた。現に私たちが滞在していた2日間の間に10人位の人々が来ていた。2014年に雑誌*National Geographic*に彼女のことが紹介されていて、それで世界中に知られるようになったのかもしれない。

この村を訪ねた目的はファンオドさんを訪ねる



①フィリピン最後のタトゥーアーティストと言われる96歳のファンオドさん ②全身にタトゥーをしている村の長老 ③ファンオドさんの後を継いだグレースさん ④グレースさんからタトゥーを入れてもらっている男性 ⑤グレースさんの真剣な顔付はとても19歳とは思えない ⑥背中にタトゥーを入れた村の老婦人

ことであつたが、残念ながら現在高齢のため病院に入院中で、お会いすることは出来なかつた。その代わり19歳になるGrace(グレース)さんが後を継いでおり、若いながらも彼女にタトゥーを入れてもらうために訪ねてくる人がたくさんいた。彼女は10歳の時からファンオドさんの元で修業し、今では9年のキャリアがあり、話をしている時はまだ幼さが残る風であつたが、タトゥーの施術を行う際の様子はもう一人前のアーティストの顔付きであつた。

村を歩いていると、たしかにタトゥーをしている人が多い。ただファンオドさんのように全身に入れている人はそんなに多くなく、若い人は腕とか脚、背中といった一部だけにしか入れていない

ようだ。全身に入れている人々は、何人かの年配の方々しかお会いできなかつた。グレースさん自身にも見せていただいたが、全身というよりは部分的に腕、脚、背中の一部に入れているだけで、全身には入れていなかった。

今回のタトゥーの村を訪ねて来たことをフィリピンの友人たちに話すと、皆一様に驚いたようだった。全員がこのような村があることさえ知らないし、ましてこの村で今でもタトゥーを全身にする習慣があることなど初めて聞いたという人ばかりであつた。日本では「刺青」というと、顔をしかめる人が多いが、フィリピンでは多くの人々がタトゥーを入れていて、それはこの村のように数百年も続いてきた文化のようである。

歌と語りのライブ「花は咲く」

出演：楓民/唄い人・Emme 語り人・萩生田千津子 奏で人・松本MOCO

於：町田市民フォーラム3F ホール 2015年6月5日(金) 14:00開演

主催：日本の歌を美しく歌おう！‘わんりい’ボイス・トレの会 & ‘わんりい’

「日本の歌を美しく歌おう！‘わんりい’ボイス・トレ」の会主催の「歌と語りのライブ・花は咲く」お陰様で盛会で無事終了しました。‘わんりい’ボイス・トレの会は始めて間もなく3年目。ボイス・トレの楽しさをもっと広く知ってもらいたいということと、講師Emmeさんの疲れを知らない伸び伸びとした明るい歌声を存分に聴いてみたいと講座の中でそんな話が出るようになっての開催でしたが、ライブとしてはやや大きめの188席のホール、果たして満席にできるか心配でした。

結果は、Emme講師のボイス・トレ受講生や小田急沿線で活躍の語り部・萩生田千津子さんのファンを集めて会場はほぼ満席になり、時間を30分延長してのライブを十二分に楽しみました。来場者参加のプログラムがいくつかあり、舞台と会場が一つになって来場の方々に好評でした。今後の催しに繋がりたい試みになったのではないかと思います。

第一部のプログラムでEmme講師は、奏で人の松本MOCOさんの伴奏で明るく伸び伸びと楽しそうに



伸び伸びと楽しそうに歌うEmmeさん

Emme講師自身の持ち歌の他、「蘇州夜曲」や「愛燦々」など講師の日頃と異なる側面も披露しつつ、いつもながらの疲れを知らぬ歌唱力で5曲続けて歌いました。1部の最後は客席も一緒にボイス・トレ体験、会場の全員でホールの天井が抜け落ちるかとはばかりに声を張り上げた後、東日本大震災被災地応援歌



ほとんど満席になった町田市民フォーラム・3Fホール

「花は咲く」を皆で一緒に気持ちよく歌いましたがボイス・トレとの組み合わせはとても好評だったようです。

プログラム第二部は、楓民メンバー3名の心の通い合う舞台で、メンバーたちの温かな人柄がそのまま舞台からあふれ出てくるようでした。

さて第二部の冒頭は、山形出身の萩生田さんが東北訛りを生かして読み上げた宮沢賢治の「雨ニモマケズ」。心のひだにずんと染み込んでくるようでした。中学生の頃の教科書に掲載されていて、色々なところでいろいろな場面で出会うことが多かったこの詩に「このような読み方があるのか」と衝撃でした。

そして二部のメインのプログラムは、3人による東



参加者全員でボイス・トレ体験



楓民による語り芝居「万衆原のきつね」 優しい東北訛りに惹き付けられた

北地方の民話「万衆原のきつね」の語り芝居。今回のライブのために楓民・語り人の萩生田千津子さんが、ご自身のふるさと山形の民話をもとに脚色された物語は、何事もお金の価値で物事を測りがちな今を生きる私たちの姿も映し出されているようで身につまされました。また耳に優しい東北訛りや歌や楽器の音色にすっかり童心に戻って聴きました。

今回の来場者には、語りや読み聞かせなどをなさる皆さんも多数いらっしゃり、終了後その方たちからも「とても良かった！誘ってくださって有難う」とご挨拶頂けて主催者側として大変嬉しく思いました。

ライブ終了後、'わんりい' 会員・有為楠君代さん手作りのパウンドケーキと、手淹れのコーヒーでつつまやかな打ち上げをしました。文字通りのつつまやかさながら、楓民の皆さんとともに 'わんりい' ボイス・トレメンバーや 'わんりい' メンバーたちが力を合わせて「とても良かったね」と言い合える充実感で気持ちの良い打ち上げでした。

今回のライブに関わったそれぞれが心晴れやかに終了できたことを深く各方面に感謝したいと思います。



宮沢賢治の心も伝わる萩生田さんの詩の朗読



舞台を引き締める奏で人・MOCOさん

【アンケートより】

(参加150人? 回収55枚)

- ①どちらからお出ですか
町田市内31、都内6、相模原7、その他11
- ②今日のライブは、
イ.とても楽しかった 47
ロ.楽しかった 8
- ③今後、'わんりい' ボイス・トレに、
イ.是非参加したい 5
ロ.参加したい 22
- ④今後、楓民の催しに
イ.是非参加したい 13
ロ.参加したい 30
- ⑤今日の演奏会について(抜粋)
 - Emmeさんのボイス・トレ、体全体で表現する明るくパッキリした歌声にすっかり魅了されました。
 - とても感動しました。私もしっかり生きて行きます。
 - ユニークで清らかなステージでした。
 - 歌と語りの組み合わせはなかなかの好企画です。萩生田さんの山形弁素晴らしかった。
 - 唄い人、奏で人、語り人、それぞれから放たれるオーラを感じました。そして「いのち」の強さ・尊さのようなものを受けました。
 - 素晴らしい声 歌もお話しもよかったです。
 - とても新しいタイプの演奏会で感動しました。素敵な時間でした。
 - 今まで見たことのない演出に驚いています。
 - 「花は咲く」を皆と一緒に歌えて幸せでした。
 - 参加型演奏会楽しかったです。
 - 楽しかったです。元気ができました。

(他多数のコメント頂きました)



晴れ晴れとした笑顔の楓民メンバー (打ち上げ会場で)

若い世代に見て欲しい

映画「ソ満国境 15歳の夏」

<http://15歳の夏.com/>

監督・脚本：松島哲也 原作：田原和夫（築地書館）

今年は終戦後70周年という節目の年を迎える。終戦の日10歳だった私は80歳になった。つまり、戦争を私よりももっと直接的に体験した世代は私より高齢であり、その世代の人々は急速に減少している。

小学校の教科書で日清・日露の戦争を知ったが、それは勝ち戦だったためか美化され、明治維新を迎えて近代化が始まったばかりの日本が外国の大国を相手に勝利した日本の歴史的な栄誉という側面だけが強調されていた。大人になって「坂の上の雲」(司馬遼太郎著)を読み、その戦いが筆舌に尽くせない悲惨なものであったと知り、与謝野晶子の「きみ死に給うことなかれ」の悲痛さが身に堪えた。知ることは大切なのだ。

戦争を実体験した世代が高齢化するにしたがって戦いによる惨禍は忘れられてゆく。現に今、世界に誇る「日本国憲法」の改定が論議され、「集団的自衛権」が2014年に条件付きで容認された。また、最近の新聞の報道では、憲法改正の手続きを定めた国民投票法改正案が賛成多数で可決され、国民投票権を持つ年齢を20歳以上から18歳以上に引き下げるとのことである。

戦争を自分の体験から語れる世代が現存している間に、あの戦争がどのようなものであったのか、正しい未来選択の為に埋もれた事実を明らかにし、若い世代に分かりやすく伝えておきたい。どんな大義名分を語る戦争であろうと、戦争には非人道的側面が表裏していることを知って欲しい。そして若い世代も容赦なく戦争の渦中に巻き込まれることがありうることを知って欲しい。

××××××××

表題の映画は、当時新京(現長春、旧満州国の首都)一中に終戦当時在学した田原和夫氏が旧満州国での熾烈な体験を綴った手記「ソ満国境 15歳の夏」に基づいて、監督・松島哲也氏が新たに脚本を書き下ろし映像化した。

当時、満州国には、農林省によって各地に「報国農場」を設置、青少年勤労奉仕隊を派遣して食糧増産にその労働力を充てていた。1945年当時は、全満各地に58ヶ所の「報国農場」があり、派遣隊員は4600名に達し

ていたそうだ。田原氏たち新京一中3年生130名が1945年5月末に勤労働員で送り込まれた先は、目の前にソ連領の国境が迫り、見上げる位置にソ連軍のトーチカが望みられる「東寧報国農場」。しかも戦況悪化で現地

の関東軍が国境の守備を放棄して密かに引き上げ続けていた。新京という都会育ちの、いわばまだ15歳のお坊ちゃんたちの勤労働員は、国境守備隊の後退をカモフラージュする目的もあったと田原氏は書く。学校長からの電報一本で予定2ヶ月の勤労奉仕の期間が延長され、1945年8月9日の、日ソ不可侵条約をソ連が破り日本に侵攻開始した日を現地で迎え、置き去りにされた。

××××××××

東日本大震災から1年後の福島。仮設住宅で暮らす15歳の敬介は、震災により機材を失った放送部の作品づくりができないことを仲間たちと残念がっていた。そんな彼らのもとに突然、聞いたこともない中国東北部の小さな村・黒龍江省石岩鎮から、ビデオ一式の撮影機材が届き、取材をして欲しいとの依頼が舞い込む。

期待と不安を胸に中国へと向かった彼らは、かつて石頭村と呼ばれていたこの地の長老・金成義から、67年前のある出来事を聞かされる。それは、敗戦直前に勤労働員としてソ連との国境付近に送られ現地に残り残された、彼らと同じ15歳の少年たちの過酷な体験だった。

突然のソ連の侵攻の中を逃げまどい食べるものもなく、いつ倒れても不思議ではない状況の中、たどり着いた村の、貧しい人たちが彼らを分宿させ温かな心のこもった一夜を過ごす。

ひとりの少年が村長に「中国人である村長が、日本人である自分たちをどうして助けてくれたのか」と問う。それに答える村長の言葉がいい。

「昔、満州族の始祖であるヌルハチも、赤ん坊の時に起きた大洪水で命を助けられ、後に民族を率いる指導者になった。赤ん坊が大声で泣き叫ぶのを聞いた村人が助けたのだ。今回も、少年たちが助けを求めて声を上げ、それを聞いた石頭村の村人が少年たちを助けた。かつて満州族の歴史がそうだったように、中国の村人が日本人を助けたことによって、これからの世代にどんな新しい歴史が生まれるのか楽しみにしている」 (田井記)

2015年8月1日(土)より <http://www.ks-cinema.com/>
新宿K's cinema ☎03(3352)2471

中国語通訳付き・能楽体験ワークショップ

中国語圏からのお知り合いの方とお誘いあわせ下さい

日本文化のルーツである「能の世界」に触れて見よう足袋を履き、扇を持って舞ったり、謡をうたったり、礼儀作法を学んだりしたら、きっと何かを感じる!

2015年7月11日(土) 12:00 ~ 13:30 (11:50会場集合)

- ▲ **会場** 梅若能楽学院会館
東京都中野区東中野 2-6-14
JR東中野駅西口徒歩8分、地下鉄中野坂上駅徒歩8分
- ▲ **講師** レイヤニョウコウ
伶以野陽子
(公財)梅若会所属
(公社)能楽協会正会員東京支部シテ方観世流緑耀会主宰
- ▲ **会費** 2,000円(当日会場にて徴収)
- ▲ **持ち物**: 白足袋または白ソックス
- ▲ **申込・問合せ**: nakakita@foxmail.com
なかきた 中來田 (要事前予約制 / 7月9日まで)

辛亥革命は横浜から始まった!
横浜に残る辛亥革命の史跡を巡る街歩き
&
中華街で豪華ランチコース

孫中山は1895年に日本に亡命、神戸に上陸し、横浜に潜伏。彼が身を寄せていた場所や革命を支援した横浜の華僑ネットワークの縁の地、宮崎滔天と孫文との出会いの場など、横浜中華街とその周辺を巡る

[詳細:「チカタビ 中來田」で検索。/同一内容で7月24日(金)にも実施予定あり]

2015年7月16日(木) 10:30 ~ 14:00

- **集合場所**: 日本大通り駅
- **講師**: 中來田明男 通訳&案内(中国語)
「辛亥革命100周年記念シンポジウムinかながわ」実行委員会委員 / 神奈川県観光協会にて外国語Web作成プロジェクトに参加。中日関係史学会・会員
- **会費** 4,800円(ランチ代込み/現地払い)
- **申込・問合せ**: nakakita@foxmail.com なかきた 中來田

岡上中国語研究会新会員募集

- 毎週土曜日 10:00 ~ 12:00
- 麻生市民館岡上分館 (〒215-0027麻生区岡上286-1)
- 講師: 劉冠群 先生(北京出身)
- 会費: 月謝4,000円
- ◆ **問合せ**: ☎044-988-2031 (本間) ほんま
E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp いずみ (和泉)

◆わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

2015年7月19日(日) **まちだ中央公民館第7学習室**

- ▲ **時間**: 10:00 ~ 11:30
- ▲ **講師**: 植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲ **会費**: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ **定員**: 20名(原則として)



* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

- ◆ **申込み**: ☎090-1425-0472 (寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp (有為楠)
- ※ 8月の講座はお休みです。

◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!**

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう!!

- ▲ 7月の講座: 6月28日(火) 町田市民フォーラム視聴覚室
- ▲ 8月の講座: 8月18日(火) まちだ中央公民館・視聴覚室
- ▲ **時間** 10:00~11:30

★動きやすい服装でご参加ください

- ▲ 6月の練習歌「心の瞳」
- ▲ **講師**: Emmé (歌手)
- ▲ **会費**: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲ **定員**: 15名(原則として)



- ◆ **申込み**: ☎042-735-7187 (鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp (わんりい)

町田中国語講座 (毎月第1、第2、第4土曜日)

- **会場**: JR町田駅周辺の市の施設
- **講師**: 郁唯 先生(天津師範大学卒業)
- ※見学ご希望の方は事前に下記へご連絡ください。
- **午前クラス 10:15~12:15** 初心者大歓迎
 - ▲ **会費**: 月謝 / 3か月 10,000円
 - ▲ **問合せ**: ☎042-725-3963 (森川)
E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp
- **午後クラス 14:00 ~ 16:00**
 - ▲ **会費**: 月謝 / 4,000円/月
 - ▲ **対象**: ピンインの分かる方
 - ▲ **問合せ**: ☎090-1425-0472 (寺西)
E-mail: t_taizan@yahoo.co.jp

[2015年7月定例会及び8月定例会開催日と9月号おたより発送日 ※8月号おたよりの発行はありません。]

- ◆ 7月定例会: 7月13日(月) / 8月定例会 8月11日(火) 13:30 ~ 場所は共に三輪センター・第3会議室です。
- ◆ 9月号おたより印刷・発送: 8月30日(日) 10:30 ~ ※おたより発送準備の日はお弁当を持参ください。

麻生市民館利用団体による **あさおサークル祭2015**

参加無料

- 2015年7月18日(土)・19日(日) ● 場所：川崎市麻生市民館(小田急線新百合ヶ丘北口3分)

【'わりい' 参加のプログラム】

▲ 7月18日(土) 視聴覚室 10:30 ~ 12:00
映像で見る、麗しのチベット

冒険家・烏里烏沙さん撮影の美しく雄大なチベットとそこに生きる人々の生活の映像を烏里烏沙氏本人の解説で見る。

▲ 7月18日(土) 大会議室 14:30 ~ 15:30
山下孝之らによるケーナ(アンデスの民族楽器)演奏会

どこか懐かしく、どこか心なごむケーナの音色を生かした日本的味わいのある山下孝之さん創作曲など多数!

(公財)日中友好会館・文化事業部の催し
経営はビジュアル的に考えよう

入場無料

中国企業ロゴ・デザイン秀作展

～日本初の中国ロゴデザイン展・見えるものは?～

- 2015年7月10日～7月26日(会期中無休)
10:00(初日14:00)～17:00
- 日中友好会館・美術館
- 【**展覧会関連講演会**】7月10日(金)14:00
「経営はビジュアル的に考えよう
中国ロゴデザインの特徴及び経営思想」

- ◆ 会場：日中友好会館・大ホール
※参加自由・事前申し込み不要
- 問合せ：03-3815-5085

上海市歴史博物館所蔵の **チベットタンカ芸術展**
悠久な仏教の歴史の中でひとときわ鮮やかで神秘的な輝きを放つ、チベット仏教タンカの独特な魅力

入場無料

- 2015年7月6日(月)～17日(金)
- 10時30分(初日15時)～17時30分(最終日15時)
- 於東京中国文化センター
- ☎：03-6402-8168(中国文化センター)

初心者のための水墨画教室

【鶴川水墨画教室】体験のお誘い

生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。気楽にご参加ください。

- 講師：満柏(◎日中水墨協会会長)
- 場所：鶴川市民センター(駐車場有)
〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4
- 曜日・時間：
毎月第2、第4(月)
14:00～16:00
- 体験参加費：1000円
見学：無料
- 問合せ：野島
☎042-735-6135



語り人:萩生田千津子/唄い人:Emme/奏で人:MOCO松本

セタコンサート

【**楓民(ふうみん)・語りと歌のライブ**】

※同時開催 「帯アートと花展」

1部 歌と詩と音楽コーナー/2部 語り「高瀬舟」

- 7月11日(土)14:00開演(開場13:30)
- 座間神社・すいめいホール 座間市座間1-3437
- 2000円
- 予約・問合せ ☎046-251-0245(代)
mail: suimei@zamajinja.or.jp

Emme & その仲間による

茶の実deライブ

Emme(唄) 山本亜美(25弦箏・三味線)

- 2015年7月25日(土)14:00開演(13:30開場)
- 2000円(お茶のお土産付)
- うおがし銘茶 築地新店「茶の実倶楽部」5F(50席)
東京都中央区築地2-11-12
東京メトロ日比谷線 築地駅②③出口すぐ
- 予約・問合せ:☎03-3542-2336(茶の実倶楽部)

'わりい' 205号の主な目次

| | |
|-------------------------------|-------|
| 以德報恩 | 2 |
| 論語断片⑧聞斯行諸(聞くがままに斯れ諸を行う) | 3 |
| 媛媛讲故事(75)「白狐」 | 4 |
| 諺・慣用句(41)「後生畏るべし」 | 6 |
| 詩人尹世霖の童詩の世界⑭「海滩」 | 7 |
| 中国・城市めぐり(43) 上海と普陀山④ | 8 |
| 「'わりい'ボイス・トレの会」へどうぞ | 10 |
| 鄧さんの観光ガイド③「大同の九龍壁」 | 11 |
| 和食って、なに? | 12 |
| 雲南にまつわる私の思い出 | 14 |
| 花と温泉を求めて 韓国低山ハイキング(上) | 16 |
| フィリピン滞在記⑦フィリピンは刺青文化天国か | 18 |
| 活動報告「歌と語りのライブ『花は咲く』」 | 20 |
| 映画「ソ満国境 15歳の夏」 | 22 |
| 'わりい' 掲示板 | 23・24 |